

杉 素彦 氏の学位審査結果の要旨

主査：谷川 昇

副査：山田 久夫、長谷 公隆

前立腺全摘除術後の合併症として尿失禁があり、患者の QOL を低下させる原因の一つである。本研究は膀胱造影で得られる解剖学的特徴の中から最も優れた尿失禁の予測因子を同定することも目的とし、ロボット補助下腹腔鏡下前立腺全摘除術（以下 RALP）を施行した 150 例を対象として行われた。術約 1 週間後に膀胱造影を施行し、1 年以上経過観察した。解剖学的特徴として膀胱の縦横比、膀胱尿道吻合部の恥骨上縁からの距離、膀胱角、他に年齢、BMI、神経温存の有無、標本重量について検討した。パッドテスト、術後 1 か月および術後 1 年での尿禁制率はそれぞれ 31.3%、56%、93.3%で、多変量解析の結果、パッドテスト時は神経温存の有無、膀胱縦横比、膀胱尿道角が有意な予測因子であったが、術後 1 か月および 1 年では膀胱角のみが有意な予測因子であった。

本研究はロボット補助下腹腔鏡下前立腺全摘除術後の膀胱造影から得られる様々な解剖学的特徴を用い、尿失禁の予測因子を多変量解析し、膀胱尿道角が尿失禁の最も有意な予測因子とした初の報告である。このことはロボット補助下腹腔鏡下前立腺全摘除術後の患者の QOL の向上に寄与する新たな知見であり、博士（医学）の学位に値するものと認められた。